

鹿児島県立短期大学 人文学会論集

「人文」第38号 2014年10月31日発行 抜刷

矢野目源一譯『ダフニスとクロエ』

中 谷 彩一郎

矢野目源一譯『ダフニスとクロエ』¹

中 谷 彩一郎

ロンゴス『ダフニスとクロエ』（2世紀末～3世紀初め頃）は、ローマ帝政下のギリシア語世界で書かれた古代ギリシア恋愛小説の現存する五作品の中でも、現代に至るまでさまざまな文藝に大きな影響を与えた作品である。しかし、他の四作品が地中海を股にかけた波瀾万丈の恋物語であるのに対し、『ダフニスとクロエ』の舞台はレスボス島に限られ、海賊による誘拐や戦争など類似した要素が含まれてはいるものの、むしろヘレニズム期以来の牧歌の伝統に根ざした牧人の恋物語となっている。

日本では研究こそこれまでほとんどなされていないが、三島由紀夫『潮騒』の藍本になったことはよく知られており、翻訳もこれまでにすでに五種類生み出されている。とりわけ第二次世界大戦直後の昭和22年（1947）からは三年連続で、それぞれ江口清、呉茂一、川路柳虹の邦訳が出た。最新のものは昭和62年（1987）の松平千秋訳の岩波文庫版である。江口訳と川路訳はポール＝ルイ・クーリエのフランス語訳からの重訳であるが、古典ギリシア語原典からの翻訳は呉茂一と松平千秋という日本の西洋古典学史上を代表する大先達が手がけている。

そしてもう一冊が、この四つの翻訳に先駆けて大正14年（1925）に出版された矢野目源一訳の『ダフニスとクロエ：牧人の戀物語』である。その存在は近年まで日本においてもほとんど忘れ去られており、実際、この翻訳についての言及は、2001年に渡邊雅弘編『日本西洋古典學文獻史（一）』に掲載されたのが初めてではないかと思われる²。さらに研究発表として触れられたのは、2008年にポルトガルリスボンで開催されたInternational Conference on the Ancient Novelにおける筆者（7月24日）と渡邊顕彦氏（7月26日）それぞれの発表がおそらく初めてのものである³。矢野目源一はフランス詩やフランス文学の異彩を放つ翻訳者としてよく知られているが、彼の翻訳について書かれ

¹ 本研究はJSPS科研費23720183の助成を受けたものである。本稿の着想は2008年7月21日～26日にポルトガルリスボンで開催された国際古代小説学会（ICAN2008）でおこなった発表『The First Japanese Translation of Daphnis and Chloe』（7月24日）に端を発する。英語による発表原稿は、学会プロシーディングスの一つであるMarília Futre Pinheiro, David Konstan & Bruce Duncan MacQueen (eds.), *Cultural Crossroads in the Ancient Novel* (Berlin: De Gruyter) に収められる予定だが、未刊（2012年1月脱稿済）。2014年4月に編者のPinheiro教授から連絡があり、2014年中には刊行予定とのこと。なお、本稿は英語による発表が矢野目訳の紹介の域を出なかったのに対し、学会以降の研究成果を踏まえ、また日本語訳の研究という性格上、英語では精確に論じにくかった点を中心に詳細な分析を試みたものである。

² 渡邊（2001）, p.253。ただし、ダフニスではなく、ダフニと誤記されている。網羅的なロンゴス書誌であるFerrini（1991）の日本語訳の項（pp.253-254）にも、上述した四人の訳は再版も含めて掲載されているものの、矢野目訳は掲載されていない。なお、筆者は2007年前半に偶然ヤフーオークション上の古書店で発見して購入した。現在では国立国会図書館のインターネット上の蔵書検索にもヒットするようになったが、当時はまだ登録されていなかった。

³ Watanabe（2011）, p.233 参照（惜しむらくは、Yanome Gen'ichirō と誤記されている）。なお、7月26日当日の発表は渡邊氏が急な御都合で学会に参加できなくなったため、筆者が代読した。

た書物や解説の中でも、この「ダフニスとクロエ」の翻訳について触れたものは管見の限りでは皆無である。

本稿ではまず、訳者矢野目源一および翻訳に当たったの使用テキストについて検討したあと、この訳の大きな特徴である伏せ字箇所について分析し、最後に矢野目と『ダフニスとクロエ』の関係について、さらに広い文脈から考察したい。

訳者について

矢野目源一は1896年、東京の高級軍人の家に生まれた⁴。慶應義塾大学仏文科を卒業し、詩誌『詩王』で詩人としてデビューする。大正9年(1920)に処女詩集『光の處女』を発表した際には、序を寄せた竹友藻風にその作風が「聖潔」と形容された。在野のフランス文学翻訳者・研究者としても活躍したが、日本の古典や伝統文化にも通曉した彼の手になるフランソワ・ヴィヨンをはじめとするフランス詩の翻訳は、古語、雅語、稀語、俗語などを駆使した自由なものであった。種村によれば⁵、矢野目の個性は大正13年頃に頂点に達したが、前年の関東大震災で江戸文化の名残が喪失した結果、日本の翻訳文体も変らざるを得ない状況になる。矢野目の嗜好も次第に暗黒趣味的傾向になり、マルセル・シュウォップの短編集やアンリ・ド・レニエ『ド・ブレオ氏の色懺悔』(のち『ド・ブレオ氏の恋愛行状記』)、ウィリアム・ベックフォード『ヴァテック』など怪奇・幻想的小説の翻訳を多く生み出した。矢野目の翻訳の特徴として種村は「その過剰なまでに趣味性の勝った、ほとんど臆面もなくみずからの気質に溺れているような文体の特異である」と述べている⁶。戦後は艶笑文学の紹介に努め、ハウザー健康法や怪しげな性科学の大家としても名を馳せた。吉行淳之介「七変化の奇人」や種村季弘「黄金仮面の王：矢野目源一」からは、その特異な人物像が伺える。

本稿で扱う矢野目訳『ダフニスとクロエ』は、大正14年(1925)に近代社から出版された『世界短篇小説大系：古代物語篇』に収録された。菊判で天金、背が赤、表紙が緑の装幀で661ページある。世界短篇小説大系は全十六巻あり、第一巻にあたる古代物語篇には、短編集というよりもその先駆として、古代と中世を中心とした様々な作品に含まれた挿話が収められている。たとえば、聖書、ヘロドタス(=ヘロドトス)、少ブリニイ(=小ブリニウス)の手紙、アピュレイアス(=アプレイウス)『黄金の驢馬』から「三人の盗賊の冒険」と「キューピッドとサイキ」、ジャック・ドゥ・ヴォラヂイヌ(=ヤコブス・デ・ウォラギネ)『黄金伝説』、ダンテ『神曲』、ボッカチョ『デカメロン』、チョーサー『カンタベリー物語』、マルグリット・ダングウレム『ヘプタメロン』、セルヴァンテス『ドン・キホーテ』などから採られた挿話である。他がより大きな作品からの抜粋なのに対して、『ダフニスとクロエ』のみ作品全体が収録されているのも特徴である。矢野目はまた、同書の中で「アミとアミール(佛蘭西中世紀傳説)」の翻訳も手がけている。

奥付に非売品とあることから、会員制の予約出版だったと思われる。近代社の吉澤孔

⁴ 矢野目源一の略歴については、亀井・杳掛(2005)、種村(1976)、吉行(2002)を参照した。

⁵ 種村(1976), pp.175-176.

⁶ 同上 p.171.

三郎は 1920 年代の予約出版の先駆者の一人と考えられる人物で、三島由紀夫らが子供の頃読み親しんだ『世界童話大系』も出版したが、1926 年末からのいわゆる円本ブームの中で競争に敗れ、倒産したらしい⁷。

底本について

では、矢野目源一訳『ダフニスとクロエ』の考察に入りたい。まず底本であるが、翻訳に用いられたテキストが何かは明示されていない。矢野目はフランス文学の翻訳者として知られているが、『ダフニスとクロエ』も作者名がロンゴスではなく、フランス語読みのロンゴスと記されていることや、神名の表記がジュピテル（ギリシア神話のゼウス）、ヴェヌス（ギリシア神話のアフロディーテ）など、明らかにローマ神話風の名前であることから古典ギリシア語の原典に基づいているのではなく、フランス語訳からの重訳であると考えられる。

『ダフニスとクロエ』のフランス語訳としてよく知られているのは Jacques Amyot の古典的名訳（1559 年初版）と、それを改訂した Paul- Louis Courier 訳（1810 年初版）である。1807 年 12 月に Courier がフィレンツェ写本（*Florentinus Laurentianus Conventi soppressi* 627）を再発見したことで、Amyot が用いたパリ写本（Paris Gr. 2895）などヴァチカン写本（*Vaticanus Graecus* 1348）系統の写本群にあった空白部分 *lacuna*（1.12.5-1.17.4.）が初めて補われた⁸。この箇所が訳されていることから矢野目が用いた底本が Courier により空白部分が補われた 1810 年以降に出版されたものであることは疑いない。Ferrini のロンゴス書誌によれば、1810 年から矢野目訳が出た 1925 年までの間に出版されたフランス語訳 83 冊のうち九割以上が Amyot-Courier 版であり、いくつか訳者が明記されていないものを除けば（確認した限りでは、それらもほとんどが Amyot-Courier 版だと思われる）、それ以外の訳は Charles Zévort（1856, 1883, 1884）のものだけである。

実際、第二次世界大戦後まもなくのフランス語からの重訳である江口清と川路柳虹の翻訳は共に Courier 訳によっていることが、作者名自体がロンゴスではなく、それぞれクウリエ、クーリエと記されていることからわかる。ところが、矢野目訳は Courier には見られない多くの特徴から、底本が Courier 訳ではないことは明らかである。たとえば、Courier は古典ギリシア語原典にある序を第一巻の中に組み込んでいるため、いきなり第一巻から始まるが、矢野目訳では「緒言」という形で序が独立しており、これはもう一つの 19 世紀のフランス語訳である Zévort 版で原典同様に序（PRÉAMBULE）が置かれていることに対応する。

人物名や地名の表記もしばしば Courier 版とは異なる。Courier では Cleariste、Lycenion、Eudrome、Syringe、Hippase と表記されている名前が、矢野目訳ではクレアリスタ、リセニウム、エウドロモス、シュリンクス、ヒッパソスと訳されており、この表

⁷ 小田 (2009), pp.186-193.

⁸ ただし、アンジェロ・ポリツィアーノやアンリ・エティエンヌのように 15、6 世紀にフィレンツェにある写本を直接読んで知っていた人物は存在する。Barber (1989), pp.5-8.

⁹ Ferrini (1991), pp. 135-162.

記と合致するのはやはり Zévort 訳の Clearista, Lycenium, Eudromos, Syrinx, Hippasos である。

また、両仏訳の異同も矢野目が Zévort 版を用いたことを示唆している。たとえば矢野目が「このときドリラスとラモンはいづれも同じ晩に、同じ夢を見たことがあつた」(p.119) と訳している場面 (1.7) は、Courier 版では Lamon et Dryas en une même nuit songèrent tous deux un tel songe. となっているが、Zévort 版では lorsque Dryas et Lamon eurent la même nuit la vision suivante. となっている。「このとき」に当たる lorsque や「ドリラスとラモン」という名前の順序の一致から Zévort 版に従っていることがわかる。

また、ドルコンがクロエを待ち伏せして襲うため狼皮をかぶったときに、狼の顎が彼の頭を覆う様 *ὥσπερ ἀνδρὸς ὀπλίτου κράνος* 「重装歩兵の兜のように」(1.20) を、Courier が *manière de cabasset d'un homme de guerre* と訳しているのに対し、Zévort は *comme le cimier d'un hoplite* と訳している。ここから、homme de guerre 「軍人」よりもギリシア語の重装歩兵を表す hoplite を訳に用いた Zévort 版を踏襲して矢野目は「歩兵^{ホプリタイ}の冑のやうに頭を包んだ」(p.131) と訳したのだと思われる¹⁰。

もう一例挙げよう。ダフニスとクロエの結婚式 (4.38) で「フィイレタス老人は例によつて得意の蘆の横笛を、ラムピスは牧笛の囃子方をうけたまはり、ドリラスとラモンは所作事を踊り、」(p.237) とあるが、ドリラスとラモンの踊りへの言及は Courier 訳からは脱落しており、Zévort のみに訳されている。また参列者に「フィレタスとその息子達」とあるのは、Zévort 訳の *Philétas et ses enfants* を訳したものであろう。Courier 訳では *les enfans de Philétas* 「フィレタスの子供たち」と子供たちだけが言及されている¹¹。

さらに、矢野目は Zévort の誤訳まで踏襲している。ダフニスに恋をしたグナトーンが主人のアステュロスに助力を乞う場面 (4.16) で、グナトーンは「ミュティレーネの若者たちよりも旦那様の料理人たちの方がずっと素晴らしいと言っていた私が、今はダフニスだけを美しいと思うようになったのです」と述べる。Zévort はミュティレーネの地名を *tous les adolescents de Milet* 「ミレトスのすべての若者たち」と誤訳しているが、矢野目訳もそのフランス語読みそのまま「廣いミレーの島」(p.217) と訳している。

以上の例は、矢野目が主として Zévort 訳を使用したことを明らかに示していると思われるが、Zévort 訳だけでは説明がつかない箇所もところどころみられる。たとえば、第一巻冒頭で、物語の舞台について「こゝに一人の長者があつてこのミティレネの都から八九里ほど離れたところに莊園を持つてゐたが、」とある。ここは距離の単位としてギリシア語原典にある古代ギリシアの単位スタディオンをそのまま踏襲した Zévort 版の *deux cents stades* (200 スタディオン) ではなく¹³、Courier 版の *huit ou neuf lieues* 「8、9 リュー」に酷似している¹⁴。文章全体を見ても、矢野目訳は Courier の *loin*

¹⁰ ルビがフランス語読みそのままオブリト、あるいは h まで読んでホプリトとなっていないのは、矢野目が古典ギリシア語形に直そうと試みた結果ではないかと思われる。ただし、正しくは単数形のホプリテスとすべきところを、矢野目訳ではホプリタイと複数形になっている。

¹¹ ただし、こちらの方がギリシア語写本に記されている表現に近い。

¹² 古典ギリシア語からの拙訳。

¹³ Dans le voisinage, à environ *deux cents stades* de la ville, un riche habitant possédait une terre.

¹⁴ Environ huit ou neuf lieues loin de cette ville de Mitylène, un riche homme avoit une terre.

de cette ville de Mitylène「このミティレーヌの街から（8、9 リュー）離れた」という表現を正確に訳しているように見える。矢野目が Zévort 訳を底本にしたのは間違いないと思われるが、こうした例から、Courier 訳も適宜参照した可能性がある。ちなみに同じ距離を表す場面でも、第三巻冒頭の cents stades（100 スタディオン）は Courier 訳の six lieues「6 リュー」そのままではなく、矢野目訳では「四里」と訳されている。これは Zévort 版の stades 表記では 200 スタディオン（1.1）と 100 スタディオン（3.2）で、ちょうど半分になるはずの距離が、Courier 版の 8.9 リューと 6 リューでは半分にならないので、矢野目が訳す際に整合性を考えて直した結果と考えられるのではないだろうか。

その他、一見 Courier 訳と Zévort 訳のどちらにも負っていないように見える箇所がある。たとえば、フィレータースの息子ティーテュロスがフランス語訳では Courier と Zévort 共に Tityre なのにもかかわらずチチロスと古典ギリシア語風の表記になっている。同様に Dionysophane が、矢野目訳ではフランス語読みのディオニュソファヌではなく、ディオニソファネス、その息子 Astyle もフランス語読みのアステュールではなく、アスティレスになっており、父子どちらも語尾に -s が付加されている。ただし、ディオニュソファネスの方は古典ギリシア語読みだが、アスティレスの方は古典ギリシア語ならアステュロスであるし、英語やラテン語の表記でも Astylus なので、ありえない形である。これらは上述のホプリタイのように、矢野目が翻訳に際して、やや不正確ながら語尾を古典ギリシア語風に表記しようと試みた結果だと考えれば説明がつくのではないだろうか。地名の Méthymne をフランス語読みのメティンヌではなくメティムネ、Mitylène をミティレーヌではなくミティレネと訳しているところにも同じ傾向がみられる。

以上から、矢野目は翻訳に際し、Zévort 訳を底本にしながら、適宜 Courier 訳も参照し、時には独自の改変をおこなっているらしいことがわかる。

伏せ字

さて、矢野目訳『ダフニスとクロエ』の視覚的に大きな特徴として、大量の伏せ字が挙げられる。近代の日本では大日本帝国憲法で「法律ノ範囲内ニ於テ」出版と言論の自由が認められてはいたものの、その法律には 1893 年（明治 26 年）に公布された出版法や 1909 年（明治 42 年）に公布された新聞紙法などがあり、内務大臣の命令による発売頒布禁止と差し押さえに関する規定があった¹⁵。伏せ字とは発禁処分を逃れるために政治的あるいは性的言及箇所編集がおこなった内部検閲・自己規制のことである。

たしかに『ダフニスとクロエ』のエロティックな場面は、近代ヨーロッパにおける翻訳でも道徳的な観点から度々削除や省略、書き換えの対象になり、文章の途中から突然ラテン語訳になるといった変更も行われたことはよく知られている。とりわけ、リュカイニオンのダフニスへの性の手ほどき（3.15ff.）とグナトーンのダフニスへの少年愛の性癖（4.10ff.）には、その傾向が強い。古くは 1559 年の Amyot 訳ですでに前者は密かに削除されており、1855 年の Rowland Smith 訳では不適切と考えられた箇所は削除され、脚註にその箇所のラテン語訳が掲載されている。20 世紀になってからも Loeb Classical Library 所収の Edmunds 版（1916）では、リュカイニオンの性の手ほどきでも、グナトー

¹⁵ 紅野（2009）, pp.14-15.

ンの少年愛でも、英語の対訳が突然ラテン語訳に変わる箇所がある。なお、Edmunds は George Thornley の英訳 (1657) を改訂して使用しているのだが、Thornley はこうした箇所も英訳しており、ラテン語訳は Edmunds の判断によるものである。

しかし注目すべきは、矢野目訳の伏せ字箇所がそうした欧米の近代語訳の自己検閲と比べてもはるかに多い点である (図 1 を参照)。まずは、伏せ字になった箇所を具体的にみてみよう。使われた記号には、まとまって「・・・、・・・。」のように、一文があったことは示しつつ、スペース的にはある程度縮めて伏せられている箇所と、「○○○○○」のように一文字ずつ活字と置き換えられたと思しき箇所とに分けられる。おそらく前者は早い段階で伏せ字化が決まり、後者は印刷段階など後になって追加で本来あるべき文字の活字と置き換えられたものであろう。なお、『世界短篇小説大系：古代物語篇』全体では、『黄金伝説』に一箇所と『デカメロン』および『ヘプタメロン』からの挿話の複数箇所に伏せ字が見られるものの、すべて「○」のみで、「・」による伏せ字は『ダフニスとクロエ』以外には見られない。言い換えれば、それだけ『ダフニスとクロエ』には自己規制を施すべき箇所が多かったということである。

以下が、矢野目訳『ダフニスとクロエ』のすべての伏せ字箇所である。ここでは、どのような箇所が伏せ字で削除されたのかわかるように、「○」部については Zévort 訳からの和訳を補い、「・」部については短い箇所については和訳を補うが、それ以外は基本的に概要を記す。

第一巻

- (1) p.131 ll.4-5: ○で 48 字分削除。

Zévort: 1.20 「ドルコンはクロエが一人きりの時に彼女を力ずくで襲おうと考えた」

第二巻

- (2) p.149 ll.7-8: ○で 24 字分削除。「何を食べやうと何を飲まうと、どんな面白い事を聞かうとも、戀の病を癒す薬といはうなら、○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○外にはまづあるまい。」

Zévort: 2.7 「接吻と抱擁とすっかり裸になつて一緒に寝る以外は」

- (3) p. 150 ll.9-10: ○で 24 字分削除。

Zévort: 2.8 「接吻と抱擁と地面にすっかり裸になって寝る」

- (4) p. 150 l.15-p.151. l.1: ○で 60 字分削除。「今までになかったことである。[○で 60 字分]。これはあまりな事に思はれたからである。」

Zévort: 2.9「お互いに腕をからめて抱き合った。三つ目の治療法のすっかり裸になって寝ることについては、あえて試みなかった。」

- (5) p.151. ll.4-8: ・で 10 文分削除。

Zévort: 2.9 接吻も抱擁も役に立たなかったの、最後の手段である一緒に寝ること

を試みなければならないというダフニスとクロエの台詞。

(6) p.151 ll.11-12: ・で 2 文分削除。

Zévort: 2.10 接吻と抱擁はするが、三つ目の療法（＝裸で一緒に寝る）ははかどらない場面。

(7) p.151 l.15-p.152 l.3: ・で 2 文半分削除。

Zévort: 2.11 接吻と抱擁をするうちにダフニスがやや激しくクロエを引き寄せた拍子に二人は横倒しになったが、ただ抱き合ったまま横になる場面。

(8) p.171 ll.12-13: ○で 40 字分削除。

Zévort: 2.38 「それから互いに接吻を交わして、抱き合い、地面に横になった。」

第三卷

(9) p.180 l.12: ・で行の中間部削除。「一度ならず接吻をしては、目をつぶつて、……ゐるつもりになつてみた。」

Zévort: 3.9 「彼（ドリ阿斯）に接吻し、また接吻をしては、夢でクロエを抱きしめて接吻しているつもりになっていた。」

(10) p.183 l.6-p.185 l.5: ・で 36 文分削除。

Zévort: 3.13-14 春になって羊や山羊が交尾する様を見たダフニスがクロエと裸になって一緒に寝てくれるよう頼むが、クロエに羊や山羊は立ったままで交尾しているうえ、裸ではなく厚い毛皮を着ていると疑問を投げかけられる。着衣のまま横になり、試しに羊や山羊のように後ろから抱きついてみたものの、どうすればよいかわからずに嘆く場面。

(11) p.186: ○で文中 42 文字分削除。

Zévort: 3.15 「二人を苦悩から救い出すと同時に自らの欲望を満たすのに一石二鳥の好機だと考えて」

(12) p.187 l.6: ○で 6 字分削除。

Zévort: 3.17 「お前に愛の行為を教えて」

(13) p.187 ll.7-12: ・で 5 文分削除。

Zévort: 3.17 リセニウムからダフニスへの性の手ほどきへの誘い。

(14) p.187 l.15: ○で 26 字分削除。

Zévort: 3.18 「自分がしたいと思っていることをクロエにできる（方法）」

(15) p.188 ll.2-9: ・で5文分削除。

Zévort: 3.18 リセニウムのダフニスへの性の手ほどき。

(16) p.188 l.10: ○で19字分削除。

Zévort: 3.19 「すぐに彼女（クロエ）に、習ったばかりのことをすべてしたがった」

(17) p.188 l.12- p.189 l.4: ・で6文分削除。

Zévort: 3.19 リセニウムからダフニスが処女であるクロエの相手をする場合の忠告。

(18) p.189 ll.6-7: ○で17字削除。

Zévort: 3.20 「クロエに接吻と抱擁以上を得ることを強いるのは」

(19) p.189 ll.7-12: ・で8文分削除。

Zévort: 3.20 クロエが血まみれになるのを恐れてこれまで通りの仕方で楽しむことにして森を出た次第。

(20) p.189 l.13: ○で42字分削除。

Zévort: 3.20 「彼女（クロエ）を腕にしっかり抱き締めて、リセニウムとの愛の格闘でしたように、彼女に接吻した。」

(21) p.190 l.2: ○で31字分削除。

Zévort: 3.20 「そして彼（ダフニス）が食べている間に、彼女（クロエ）は自分も食べるために、雛鳥が母鳥にするように、彼の口からかけらを取った。」

(22) p.190 l.4: ○で8字分削除。「食事の間すら、食べること○○○○○○○○忙しかつたといふわけである。」

Zévort: 3.21 「軽い食事をしている間すら、食べることよりも接吻しあうことに忙しかった」

(23) p.193 ll.1-4: ・で3文分削除。

Zévort: 3.24 時には裸になって横になることもあるものの、ダフニスはリセニウムの忠告を恐れて、クロエにあまり裸になることを許さない。

第四巻

(24) p.212 l.12: 文の途中で、・と○で18字分削除。

Zévort: 4.11 「そして・・・さらに下の部分（下腹部）」

(25) p.212 l.13-15: ・で1文分削除。

Zévort: 4.11 少年好きのグナトンが美少年のダフニスをわがものにしようと考えた

こと。

(26) p.213 ll.8-9: ・で2文分削除。

Zévort: 4.12 グナトンがダフニスに接吻し、牝山羊が牡山羊のように身を任せるよう頼んだ次第。

(27) p.213 ll.10-12: ・で2文分削除。

Zévort: 4.12 グナトンの誘いに対してダフニスが牡に牡が乗るのは見たことがないと反論。

(28) p.213 l.13: ○で15字分削除。

Zévort: 4.12 「しかしグナトンは彼（ダフニス）に手をかけて、無理矢理凌辱しようとした」

(29) p.214 ll.9-10: ○で37字分削除。

Zévort: 4.13 「だからグナトンは折りをみて恋の長口舌をしようと企んでいた。」

(30) p.216 l.15: ○で12字分削除。「グナトンは美しい牧人の振舞を見れば見るほど○○○○○○○○○○○○、」

Zévort: 4.16 「しかし、グナトンは、山羊飼いを見ることでいっそう胸が燃え上がり、」

(31) p.218 ll.6-7: ○で47字分削除。

Zévort: 4.17 「どうしてそんなに若い山羊飼いが傍らに寝ているのを見たいのか。」

(32) p.222 l.2: ○で18字分削除。

Zévort: 4.19 「しかしダフニスが、女のように使うためにミテュレネに連れていかれ、グナトンの慰みものになることには同意できません。」

(33) p.238 ll.8-12: ・・・・で2文削除。

Zévort: 4.40 ダフニスとクロエの初夜の記述。

以上から矢野目訳の伏せ字の特徴として、次のような点が挙げられる。

まず、性行為を示唆するものはたとえ曖昧な表現でも削除される。自分の思いが叶わなかったドルコンがクロエを襲おうとした場面(1)に始まり、近代ヨーロッパ語訳では削除されることがないフィレータースが教えた恋の治療法の「接吻と抱擁と裸になって一緒に寝る」(2.8)という曖昧な教えも削除され、その後の言及でもすべて伏せ字となっている[(2)～(8)]。より具体的なリュカイニオンの性の手ほどきにいたっては[(11)～(19)]、Amyot 訳初版では具体的な行為の描写は密かに削除されているものの、リュカイニオンがダフニスに性の手ほどきをした事実は述べられているのに対し、矢野目訳で

はそもそもリセニウムの抱いた欲情すら削除されている。その結果、リセニウムとダフニスとの間に何が合ったのかはほとんどわからなくなっている。その後リセニウムの教えや忠告に言及した箇所もすべて削除されている [(20) や (23)]。その他、羊や山羊の交尾を真似ようとするダフニスとクロエの大胆な行為 (10) や初夜の場面 (33) も削除されている。

次に少年愛的性癖に関する描写が削除されている。(24)～(32)のグナトンへのダフニスへの横恋慕がこれに当たる。また、(9)はクロエの家に泊まったダフニスがクロエの義父ドリ阿斯と同じ床に寝る場面だが、夢うつつでクロエだと思ってドリ阿斯に接吻を繰り返す様が同性愛的だと捉えられたのかもしれない。

あとは、(21)と(22)のクロエがダフニスと接吻をしながら口移しで食べる場面が削除されているが、接吻そのものは許容される場合が多いので、これは口移しの行為が当時のモラルからはいささか行き過ぎと捉えられたものだろうか。

こうしてみると、近代ヨーロッパ語訳の自己検閲と基本的な傾向は変わらないものの、矢野目訳への伏せ字の方がより範囲が広がっている。この違いはどこから生じるのだろうか。矢野目訳とほぼ同時代の 大正 11 年に初版が出た宇野慎三『出版物法論』の解釈によれば¹⁶、猥褻事項とは「記事若し描写されたる事項が人の性欲を挑発し卑猥の感を起さしめ以て国民の同義的良心感覚を害するものであり、「露骨に描写したる場合にみに限定すべきではなく、「扇情的文辞を以てし、醜猥なる行動を連想せしむるに足る淫靡なる記事」で、読者に「羞恥嫌悪の感を懐かしむるもの」である。言い換えれば、具体的な表現だけでなく、読者に引き起こされる感情を重視していることがわかる。その結果、矢野目訳ではフィレータースの教えのような曖昧な表現であっても性行為を示唆する以上、削除対象になったのではないと思われる。

他方、「しかしダフニスは、クロエが一糸をまとはない裸形となって、これまで隠されてゐた美しさを眺めてから、心の怪しく亂れ初めるのおぼえたのであつた」(p.142)、「かうして接吻の甘さを味ひ始めてゐた。そして歡樂に満ち足ることができないまゝで戀に酔つてゐた」(p.151)のように、水浴場面での裸の描写や接吻や抱擁の描写は問題ないようである。中には、接吻と抱擁についても伏せ字にされている場合もあるが [(2)、(8)、(18)、(20)、(22)]、性行為への言及と組み合わせられた場面だけである。むしろ接吻だけなら描写が多少熱烈なものでも許容されている。再び、宇野によれば、

例へば抱擁接吻の如きは欧米諸国の風俗習慣に於て一般に認められ欧米人の道義良心は之が為めに傷けらるることはないが我国古来の伝習に於ては一種の淫猥なる動作として顰蹙せられて来た。然し交通関係の密接や道德思想の変遷は我国の因習的道德観を変化せしめ今日之に對し淫猥なる行為の名称を以てするを得ない傾向を有しつつあるは何人も認むるところである。¹⁷

とある。ここから抱擁と接吻に関しては大正時代後期にはすでに欧米からの影響と道德観の変化の結果、寛容になりつつあった様子が窺える。矢野目訳に対する伏せ字の判断

¹⁶ 宇野 (1923), pp.217; 紅野 (2009), p.41.

¹⁷ 宇野 (1923), pp.217-218

も同じような基準でおこなわれたのではないかと考えられる。

矢野目訳に施された伏せ字は傾向としては欧米の近代語訳同様に性行為や少年愛を示唆する箇所を中心に削除されている。しかし、大正時代の法律や道徳観に鑑み、具体的な描写だけでなく、読者に性的な連想を引き起こしうると言及にまでその範囲は広げられ、他に類を見ないほどの自己規制がおこなわれた。実際には『ダフニスとクロエ』の物語は季節の移り変わりと共に、主人公の男女の恋愛が恋という言葉も知らない段階からフィレータースやリュカイニオンの教えを経て徐々に進展し、結末の結婚と初夜に至るところに主題があるのだが、矢野目訳では伏せ字により、その重要な要素のほとんどが読めない結果になってしまっているのである。

矢野目源一と『ダフニスとクロエ』

最後に、矢野目源一と『ダフニスとクロエ』の関係について、翻訳を越えた広い文脈から考察したい。矢野目がフランス語から翻訳を多くおこなっていることは、すでに述べた通りだが、『ダフニスとクロエ』の訳が出版される前年の大正13年には Marcel Schwob (1867-1905) の短編集 *Le Roi au masque d'or* (1892) の翻訳を『吸血鬼』のタイトルで出版している。この中の短篇「ベアトリス」には、作者ロンゴスとダフニスとクロエへの言及がある。

私はベアトリスを愛していた。彼女もまた私を憎からず思つてゐた。詩人ロンゴスの物悲しい物語の頁に単調な諧調をつくつて落ちて来る散文の詩句を讀んでゐるときなどに、われわれは互に愛の心を誓ひ合つてゐたものだ。

しかしわれわれは丁度ダフニスとクロエが彼等の肉身の愛を知らなかつたやうにわれわれの靈魂(たましひ)の愛といふものを知らなかつた。¹⁸

「詩人ロンゴス」の箇所には訳者の註がつけられ、「ロンゴスは四世紀のギリシヤの詩人で可憐なるダフニスとクロエの戀物語の著者である」と説明されている。さらに注目すべきは、昭和4年(1929)に同じくシュウォップの手になる *Mimes, avec un prologue et un épilogue* (1894) を『古希臘風俗鑑』として翻訳していることである。この作品の序詞と末詞ではダフニスとクロエがさらに効果的に用いられている。

たちまちレスボス島の牧にあるとおぼしきあたりにダフニスとクロエの姿が浮み上つて來た。それを見ると私は地上の夜の間に彼等が第二の轉生の悲しみを味ふことの惱しさを感じることが出來た。そこで善い女神はダフニスに月桂樹の身體を與へ、クロエには緑の柳の恵を下しおかれた。ここに於て私は立樹の静けさと鳴らさむ枝の歡びとを味ひ識ることが出來たのである。(「序詞」)

末詞にいたっては、序詞に対応して全体がダフニスとクロエを主人公にした挿話で占められている。二人は若くして命を召されて黄泉の国にやってくるが、お互いを忘れないためにレエテの河の水を飲まなかったため、過去の記憶が残っており、その思い出に心を悩ませている。それを憐れんだ冥界の女神ペルセフォネに二人を慰めることを命じら

¹⁸ 矢野目訳(1924), p.89.

れた幽魂の司は二人を「夢」に誘い、ダフニスとクロエはレスボス島を見に帰る。森の女神の洞穴や、クロエの懷で鳴き出した蟬をダフニスが取ったこと、クロエが泉で裸になったのを見た時やクロエに初めて接吻してもらった時のダフニスの気持ち、冬にダフニスがクロエ会いたさにクロエの家近くで小鳥の罌を仕掛けたことなど、二人の思い出として原作からのエピソードが散りばめられる。しかし、死者となった今では二人の交わす接吻には「もう針で刺すやうな味も自然のままの香氣も失くなつてゐる」て、海岸で大きな櫂の音を聴くものの船は現われず、「大神（おほみかみ）パンみまかりぬ」という木魂が響き渡って来る。二人を守ってくれた牧神パンもすでにいないのである。

このように、原作を踏まえながらも、二人が若くして死んで冥界に降りて来たことや、レスボス島が二人の無限に増えた魂、すなわち月桂樹と青柳で覆われる結末など原作にはない新たな要素を加え、シュウォップ独自の印象的な世界を創り上げている。この翻訳自体は矢野目自身の『ダフニスとクロエ』訳の四年後に出版されたものだが、同じシュウォップの作品である以上、*Mimes* も矢野目はすでに読んでおり、*Le Roi au masque d'or* と共に『ダフニスとクロエ』への関心を高めた可能性は十分にある。

それからさらに二十年ほど後になるが、戦後の昭和 24 年（1949）には、矢野目の自作自編で『恋愛スタイルブック』という小冊子が発行されている。ロンサアルの恋愛詩やオウィディウスの戀愛療法の翻訳、さらには矢野目自作のものも含めた艶笑譚が集められている。ここには巻頭四ページにわたって、カラー挿絵付きで『繪物語ダフニスとクロエ戀物語』が掲載されている（図 2 を参照）。クロエの水浴場面の挿絵もあり、要約とはいえ、ここには大正 14 年の翻訳では伏せ字になっていた箇所のうち、ファイレタスの教えと初夜の場面が含まれている。

「近所に住むファイレタスといふ老人が通りがかつた。彼はダフニスとクロエが戀仲になつてゐながら田園の素朴の中に生い育つて接吻と抱擁以上のことは何一つ知つてゐないのを憐んで、戀の悩みを癒さうなら、帶紐解いて一つ寝することだと教へてくれた。」

「ダフニスとクロエはその夜は鼻のやうに夜もすがら眠らなかつた。そして二人が牧場でした抱擁は子供の遊びでしかなかつたことを始めて知つたのである。」

欧米でも 20 世紀半ばまでは道徳的な観点から『ダフニスとクロエ』を非難する者は少なからずいた。たとえば、17 世紀の Huet は「あまりに淫らなので、顔を赤らめずに読むには多少、反世間的にならなければならない」と述べており¹⁹、18 世紀の Florian は「自然と優美さ、繊細さの無比の模範であるが、露骨すぎる表現がなければ、もっと良かった²⁰」と作品を賞賛しながらも、その「露骨すぎる表現」には難を示している。19 世紀の Dunlop は、

yet there are particular passages so extremely reprehensible, that I know nothing like them in almost any work whatever. This depravity is the less excusable, as it was the

¹⁹ Huet (1671), p.37; Hardin (2000), p.65.

²⁰ Florian (1788), p.15; Hardin (2000), p.77.

professed design of the author to paint a state of the most perfect innocence.²¹

と、他のどの作品にも見たことがないほどの非難されるべき文章があると批判しているし、20世紀半ばになってもなお Helm のほとんどポルノ紛いで不潔極まりない作品だとの評がある。²²それが『ダフニスとクロエ』の研究が近年までなかなか進まなかった原因の一つとして挙げられる。しかし、矢野目は決して『ダフニスとクロエ』をポルノとは考えなかった。吉行の矢野目評によれば、

いまは時代が変わって、粹でスマートな猥文も存在する余地ができてきた。しかし、昔は猥本というものには、どうしても陰湿さがつきまとった。往年のダンディ矢野目源一としては、その種のものには手を触れないという身構えがあって、短いピンク・コントはたくさん書いたが、ポルノには手を染めなかった。²³

自作自編の『恋愛スタイルブック』からもわかるように、矢野目は単に猥雑なもののは嫌い、艶かしさのうちにも機知やユーモアを含んだ作品を好んだようである。『ダフニスとクロエ』もまた、彼がよく扱ったさまざまな艶笑文学同様、エロティックな要素を含みながらも機知とユーモアに富んだ作品と捉えていたのではないだろうか。これは近年の欧米での研究において『ダフニスとクロエ』がたわいもない単純な恋物語ではなく、ホメロス以来の数々の古典に通暁した洗練された作者による、多分にアイロニーを含んだ作品であるとみなされるようになってきたことと相通ずるところがある。²⁴したがって、編集部による大量の伏せ字に覆われた大正時代の翻訳は矢野目にとって不本意なものだったことは想像に難くない。だからこそ戦後になって要約という形とはいえ、巻頭フルカラーで『ダフニスとクロエ』を再び採り上げたのではないだろうか。『ダフニスとクロエ』は、こうして戦前から戦後に至る四半世紀に渡って、矢野目源一を魅了しつづけたのである。

²¹ Dunlop (1876), p.32.

²² Helm (1956), p. 51.

²³ 吉行 (2002), 232.

²⁴ たとえば、Hunter (1983), Goldhill (1995), Morgan (2004) など。

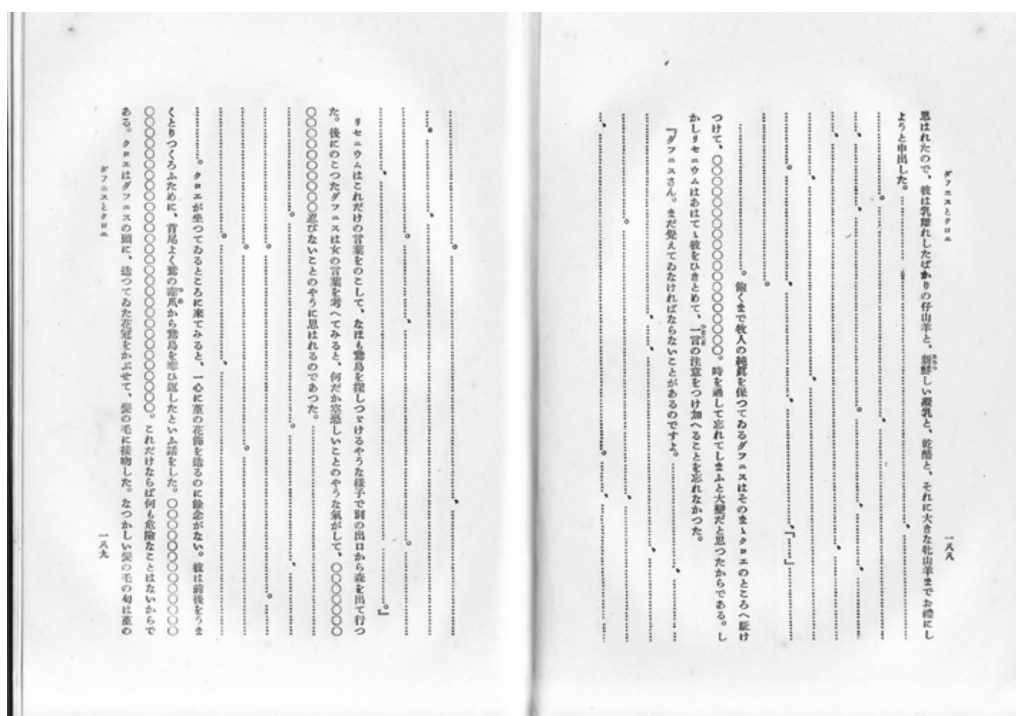


図1 矢野目譯『ダフニスとクロエ』の伏せ字



図2 矢野目編「繪物語ダフニスとクロエ戀物語」一頁目と三頁目

参考文献

一次文献

ロンゴス『ダフニスとクロエ』

ロンゴス (矢野目源一譯) 『ダフニスとクロエ』『世界短篇小説大系: 古代物語篇』(近代社、大正十四年)、pp.113-238.

クウリエ (江口清譯) 『ダフニスとクロエ』(思索社、昭和二十二年)

ロンゴス作 (呉茂一譯) 『ダフニスとクロエ』(養徳社、昭和二十三年)

クーリエ (川路柳虹譯) 『ダフニスとクロエ』(日本教文社、昭和二十四年)

ロンゴス (松平千秋訳) 『ダフニスとクロエ』(岩波文庫、昭和六十二年)

Amyot, Jacques (trans.), *Les Amours Pastorales de Daphnis et de Chloe: escriptes premierement en Grec par Longus, & puis traduits en François*. (Paris: Vincent Sertenas, 1559). [BNF: 17052 (Réserve)]

idem, *Les Amours Pastorales de Daphnis et de Chloé, Avec Figures* ([Paris: n.p.], 1718).[BL: 243.e.11]

Courier, Paul-Louis (trans.), *Les Pastorales ou Daphnis et Chloé par Longus* (Paris: Georges Crès et Cie, 1914).

Edmunds, J.M. (ed.), *Daphnis & Chloe by Longus. With the English translation of George Thornley, revised and augmented by J. M. Edmonds / The Love Romances of Parthenius, and other fragments. With an English translation by S. Gaselee* (London: William Heinemann, 1916).

Morgan, J.R. (trans. & notes), *Longus: Daphnis and Chloe*, Aris & Phillips Classical Texts (Oxford: Oxbow Books, 2004).

Reeve, M.D. (ed.), *Longus: Daphnis et Chloe* (Leipzig: Teubner, 1994).

Smith, Rowland (trans.), *The Greek Romance of Heliodorus, Longus and Achilles Tatius* (London: Henry G. Bohn, 1855).

Thornley, G. *A Most Sweet, and Pleasant Pastorall ROMANCE for Young Ladies* (London: Printed for John Garfeild, 1657).

Zévort, Ch. (trans.), *Romans Grecs: Première série* (Paris: Charpentier, Libraire-Éditeur, 1856).

idem, *Romans Grecs: Daphnis et Chloé suivi de Théagène et Chariclée* (Paris: G. Charpentier et Cie, Éditeurs, 1884).

矢野目源一著訳書

マルセル・シュウオッフ (矢野目源一訳) 『吸血鬼』(海外文學新選 (11) 佛蘭西文學) (新潮社、1924)

マルセル・シュウオッフ (矢野目源一訳) 『黄金仮面の王』(コーベブックス、1975)

マルセル・シュオッフ (矢野目源一訳) 『古希臘風俗鑑』(第一書房、1929)

日夏耿之介・矢野目源一・城左門 『巴里幻想譯詩集』(国書刊行会、2008)

矢野目源一自作自編 『恋愛スタイルブック』(話別冊第2集) (話社、1949)

二次文献

宇野慎三『出版物法論』（巖松堂書店、1923）

小田光雄『古本探究』（論創社、2009）

亀井俊介・杵掛良彦『名詩名訳ものがたり 異郷の調べ』（岩波書店、2005）

紅野謙介『検閲と文学：1920年代の攻防』（河出ブックス、2009）

種村季弘「黄金仮面の王：矢野目源一」『壺中天奇聞：種村季弘作家論』（青土社、1976）、pp.169-180

吉行淳之介「七変化の奇人」『吉行淳之介短編集』（講談社文芸文庫、2002）、231-250

渡邊雅弘編『日本西洋古典學文献史－切支丹時代から昭和二十年までの著作文献年表－（一）』（田中プリント、2001）

Barber, Giles, *Daphnis and Chloe: the markets and metamorphoses of an unknown bestseller* (London: British Library, 1989).

Dunlop, J. *The History of Fiction being a critical account of the most celebrated prose works of fiction from the earliest Greek romances to the novels of the present age* (London: Reeves & Turner, 1876).

Ferrini, M. F., *Bibliografia di Longo, "Dafni e Chloe" Edizioni e traduzioni* (Macerata: Università degli Studi di Macerata, 1991).

Florian, Jean-Pierre Claris de, *Estelle, Roman pastoral* (Lausanne: chez Mouret, 1788).

Goldhill, S., *Foucault's Virginité* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995).

Hardin, R., *Love in a Green Shade: Idyllic Romances Ancient to Modern* (Lincoln&London: University of Nebraska Press, 2000).

Helm, R., *Der antike Roman* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1956).

Huet, Pierre-Daniel, 'Lettre de Monsieur Huet à Monsieur de Segrais de l'Origine des Romans', in Monsieur de Segrais, *Zayde, Histoire Espagnole* (Paris:n.p., 1671), pp.3-67.

Hunter, R., *A Study of Daphnis & Chloe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983).

Watanabe, Akihiko, 'From Moral Reform to Democracy: The Ancient Novel in Modern Japan', in: Marília P. Futre Pinheiro & Stephen J. Harrison (eds.), *Fictional Traces: Receptions of the Ancient Novel* vol.1, (Groningen: Barkhuis Publishing & Groningen University Library, 2011), pp.227-242.

(2014年7月25日 受理)